

第15回島根乳腺疾患研究会

日 時：平成20年4月19日 (土)

会 場：石中央文化ホール

当 番
世話人：五十嵐雅彦 (益田地域医療センター医師会病院外科)

1. 当院職員における乳がん検診の実情と問題点

松江赤十字病院消化器外科・乳腺科病棟看護師

中永 秋奈, 福間佐智子, 金津 悦子

島田 志乃, 林 美幸, 脇田 和子

同 外科

曳野 肇, 田窪 健二

女性職員を対象に乳癌検診の意識及び実態を調査するため、自己検診の方法を示したDVDを回覧し、その後にアンケートを実施した。乳癌検診の受診状況や自己検診の認知度などの調査では、マンモグラフィ併用検診の経験者は当院では9.9%と全国平均より若干高い程度であった。乳癌検診を受けたことがないとする理由としては、多忙・機会がないなどであった。DVD回覧後の自己検診の理解度についての調査では、自己検診を知っている人はほぼ全員であったがその方法の理解について、正しい方法とは違ってたと答えた人は6割であった。職員をとりまく環境要因や自己検診の知識不足は乳癌の早期発見の遅れにつながるため、啓蒙活動の継続や自己検診の正しい方法の指導活動、職場検診の乳癌項目の追加などが今後の課題である。

2. 乳腺内仮性動脈瘤の1例

益田赤十字病院外科

竹本 大樹, 村上 大樹, 塩田 摂成

岸本 弘之, 日野原 徹

まついクリニック

松井 孝夫

極めて稀な乳腺内に発生した仮性動脈瘤を経験した。症例は71歳女性。右乳房に腫瘍を自覚し近医受診。拍動を有する腫瘍を指摘され紹介。右乳房A>C領域に鶏卵大の拍動を有する腫瘍を認めた。ドップラー超音波で拍動、血流を有する血管内腔と周囲を被包する血栓からなる腫瘍を認めた。造影CTで流入血管は、内胸動脈から分枝する乳腺枝と外側胸動脈と確認した。乳腺内仮性動脈瘤の診断で摘出術を施行。腫瘍を剥離し、流入する2

本の血管を結紮切離し摘出した。標本で腫瘍は流入血管を伴い剖面で比較的太い血管と器質化した血栓を認めた。病理検査で内膜、中膜が破綻した血管とそれを被包する血栓と結合織を認め、乳腺内仮性動脈瘤と診断した。乳腺内仮性動脈瘤は検索した範囲で本邦報告例のない稀な疾患で、海外では乳腺腫瘍に対する針生検後などの合併症としての報告が散見される。乳腺腫瘍の診療では乳腺内仮性動脈瘤も念頭におく必要があると思われた。

3. 乳頭部腺腫の1例

島根県立中央病院外科

青木 恵子, 橋本 幸直, 武田 啓志

高村 通生, 影山 詔一, 田邊 和孝

中村公治郎, 杉本 真一, 徳家 敦夫

尾崎 信弘

症例は50歳代女性。右乳房の腫瘍に気づき当院受診。右乳輪下に約2cm程度の境界明瞭、可動性良好な腫瘍を触知した。乳頭部のびらんや、乳頭異常分泌は認めなかった。MMGでは、右乳輪下を中心に約2cm程度の腫瘍影を認めた。USでも、右乳輪下に直径2cm程度の境界一部不明瞭な等濃度腫瘍を認め、ABC、CNB施行した。ABCでは、2相性が不明瞭な核密度の高い集塊を認めたが、2相性を有する細胞集塊も認め、乳頭部腺腫またはDCISの疑い。CNBでは、腺管の2相性は保たれており、悪性所見は認めなかった。以上より、乳頭部腺腫の疑いと判断。

悪性化の可能性は完全に否定できないことや、本人の希望もあり、局所麻酔下に右乳輪下腫瘍摘出術施行した。

乳頭部腺腫は、本邦報告例は本症例を含めて39例の報告があり、稀な疾患である。今回、我々は本症例の1手術例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。

4. 乳癌患者に対する当院リハビリテーションの取り組み

益田地域医療センター医師会病院リハビリテーション科

椋木 恵, 廣瀬 強志, 塩満 智美
吉岡 翼, 佐田 篤

同 外科

五十嵐雅彦

近年乳癌の外科療法は非定型的乳房切除術や乳房温存術が主流となり低侵襲化傾向により患者の術後身体的・精神的負担は減ってきた。しかし、これらの手術によっても疼痛、ドレーン留置、不動による関節拘縮、リンパ浮腫などが認められ、術後早期からのリハビリが重要である。当院では乳癌患者に対してクリティカルパスを導入している。入院後術前より外科医からリハビリ処方があり理学療法を実施、術前リハビリは評価、患肢機能維持運動、呼吸練習、全身持久力運動、術後リハビリの説明などを実施、術後は手術後1日目よりリハビリ実施計画に沿って運動を開始する。具体的には患肢機能拡大運動、呼吸練習、ADL練習などである。そして退院時に退院時リハビリ指導を行い、必要であれば外来リハビリへ移行している。当院の乳癌術後患者の理学療法経過の調査を行った結果、精神面の効果の確認や自主運動の重要性を再認識し、今後の課題としていきたい。

5. 患者様のための乳腺疾患勉強会について

松江赤十字病院消化器外科・乳腺科病棟看護師
坂根真由紀, 林 美幸, 福岡佐智子
島田 志乃, 脇田 和子

同 外科

曳野 肇, 田窪 健二

当院乳腺チームは、クリニカルパスの改正、外科と病棟連携、自己検診普及の啓蒙活動、患者様のための勉強会の開催など活動を行っている。その中から今回は患者様のための勉強会報告をする。

勉強会の目的は、患者様が疾患治療についての正しい知識を習得し、治療の自己決定ができる、患者様の交流の場、患者様のニーズの把握、不安の軽減等がある。

テーマは患者様のニーズを元に決定し、病態・診断・治療の他、病棟での取り組みや専門医師、放射線技師、認定看護師などの講義を実施した。

結果、正しい知識の情報提供、情報交換の場となった。又、患者様がその場で疑問に思ったことを質問できた等の利点があった。

今後の課題：勉強会を継続するため患者様のニーズに

沿った内容を検討すること、参加者増加のため勉強会の案内を早めにし、開始時間の検討をする必要があると考える。

6. Pagetoid 型乳癌の1例

島根大学医学部卒業後臨床研修センター

藤原 英紀

同 消化器・総合外科

板倉 正幸, 小山 祥穂, 山本 徹
横山 靖彦, 下条 芳秀, 百留 美樹
平原 典幸, 田中 恒夫

Pagetoid 型乳癌の1例を経験したので報告する。症例は81才、女性、デイサービスの職員に左乳頭びらんを指摘され、Paget 病の疑いで当院皮膚科へ紹介入院、その後のMMG等精査にて左C領域に3×2cm大の浸潤性乳癌を認め、手術目的にて当科転科す。T3N0M0 Stage II Bの左乳癌の術前診断にて、左乳房切除術とセンチネルリンパ節生検を施行。病理組織学的には乳頭腺管癌を主体として硬癌が混在し、乳頭に向かって乳管内進展が目立ち、乳頭部びらんを認めた部分には、明るく豊かな胞体を持ったN/C比の低い細胞の増生を認め、浸潤性乳癌が乳管内を進展し、乳頭波及したPagetoid型乳癌と考えられた。Pagetoid型乳癌に関して若干の文献的考察を加えて報告する。

7. 乳腺葉状腫瘍の1例

独立行政法人国立病院機構浜田医療センター外科

栗栖 泰郎, 松永 知之, 坂本 照尚
高橋 節, 岩永 幸夫

【はじめに】経過観察でよい線維腺腫と、手術を要する葉状腫瘍の鑑別は時に困難と報告されている。

【症例】40歳代女性。2006年9月マンモグラフィ検診で左中外側領域に局所的非対称性陰影を指摘され、10月当科受診。左D領域に1cmの腫瘤を触知し、USでは14.1×10.1mmの腫瘤を認め、細胞診では乳腺症と診断、総合的に線維腺腫と診断した。定期的に観察し、1年後にはUSで25.9×16.2mmまで増大し、細胞診で葉状腫瘍と診断され、2007年12月2cmのマージンを確保して切除した。病理組織所見でも葉状腫瘍(境界病変)と診断されたが、葉状構造に乏しい部分も認められた。

【考察】葉状構造に乏しい部分からの細胞診では、葉状腫瘍の確定診断に至らない可能性があると思われた。

【まとめ】初診時線維腺腫や乳腺症と診断された場合でも厳重な観察を要する。

8. 化学療法による脱毛から回復期への援助の実際

島根県立中央病院看護局外来看護科

奥野 映子, 福山美佐紀, 大島留美子
狩野 京子

同 外科

高村 通生, 武田 啓志, 橋本 幸直
尾崎 信弘

当院において、年間100人近くの乳癌患者が外来化学療法を行う中、脱毛に関する相談を多く受けている。援助の実際の場合として、髪質・髪色の変化やまだらな発毛による相談が寄せられた。化学療法終了前に回復期について説明を行っていたが、実際に毛髪の変化を体験されたことにより、くせのある白髪が発毛しウィッグのずれが生じ、対処に悩まされていた。ケアとして、従来の毛髪が発毛する期間について説明し、まだらな発毛に対し毛髪カットに院内美容院を紹介した。そして、発毛したサイズにウィッグを合わせるため、ウィッグメーカーに調整を相談することを提案した。患者は、まだらな発毛をカットで整えウィッグのサイズを調整したことにより、ウィッグのずれが解決された。

本事例を通し、脱毛後の回復期の援助のポイントとして、脱毛期間や補正用品が不要となる期間を考慮し、毛髪再生状況をアセスメントしたうえでの個別的なケアが必要であることを再認識した。今後、脱毛から回復期の支援を強化するため、院内美容院のヘアアドバイザーの配置を期待したい。

9. 当院における乳癌外来化学療法の現状と問題点

—外来治療室の活動を中心に—

益田赤十字病院外来治療室

小谷 美紀, 世良恵理子, 大庭 鶴子
同 外科

村上 大樹, 竹本 大樹, 塩田 撰成
岸本 弘之, 日野原 徹

当院は地域がん診療連携拠点病院の指定を受け、昨年4月に外来がん化学療法のための外来治療室を開設した。日々の運用は専任看護師2名で行い、ミキシングは専任薬剤師が実施している。室内にはギャッジベッド2床と

リクライニングチェア2床あり、テレビ付き床頭台や洋式トイレを設置している。開設後の月平均件数は52.4件で、乳がんは25%である。乳がんプロトコールはCEF療法など6種類以上ある。さらに同じプロトコールでも医師によって指示内容が異なるため、作業効率が低下しミスにつながる可能性がある。早期に認証プロトコールを導入し、クリニカルパスを作成していきたい。

また、末梢静脈で施行する患者は9名、CVポートから施行する患者は9名である。乳がん患者には中心静脈ポートの留置も選択肢のひとつである。患者にとって最適な方法を患者自身が決定できるような環境を整えていきたい。

10. 当院における Triple negative breast cancer 症例の検討

島根大学医学部消化器・総合外科

稲尾 瞳子, 板倉 正幸, 西 健
高井 清江, 松原 毅, 百留 亮治
佐藤 崇, 川畑 康成, 田中 恒夫

Triple Negative Breast Cancer (TNBC) とはER, PgR, Her 2 いずれの発現も認めない乳癌のグループで、比較的予後不良といわれている。今回 TNBC と non-TNBC の臨床病理学的特徴について検討した。

対象は過去27年間に当院で手術を施行した412例で、平均年齢は58.6歳であった。高齢化の進む島根県の特徴を反映し、50歳未満は28.8%、50歳以上が71.2%であった。ER, PgR, Her 2 (Herceptest 2+以上) の陽性率はそれぞれ67.3%, 65.4%, 63.9%であった。TNBCは32例(7.7%)であり、50歳未満でのTNBCの割合が高かった。

RFSやOSでは、TNBCとnon-TNBCに有意差を認めなかったが、OSで5年未満の状態ではTNBCの予後が不良な傾向が見られた。これらについては、術後の補助化学療法が有効であった可能性、TNBCでリンパ節転移陰性例が多く、進行例が少なかったこと、TNBC自体の症例数が少なかったことなどが、理由として考えられた。